

特務機関のまえに現れた新たな敵…

洗脳され…

肉棒を求めだした英雄たちを止めることはできない…!?

**洗脳**されてしまった**王女**と仲間たち

ファイアーエムブレムヒーローズ 異種森CG集

DEEPRISING

**洗脳されてしまった王女と仲間たち**



エンブラ帝国との戦いが続くアスク王国  
召喚士と英雄たちの活躍により何とかエンブラ帝国の侵略を  
抑え耐えてきた特務機関の面々であったが  
長い戦争が続きさすがの英雄達にも疲労の色が見え始めていた

英雄達を呼び出す役目を負う召喚士も  
度重なる召喚の儀の連続で疲弊していた…

そんな時…アスク王国の隣国…  
氷の国「ニフル」にて  
何か異常な事態が起きているとの知らせが特務機関に寄せられた

「報告します！アスク王国東領にて争いが起きている模様です！」

「争いっ…またエンブラ帝国が！？」

「いえ、…それが今回は違うみたい…。」

炎に襲われ火傷を負った兵士たちを見たアンナ隊長は  
それがエンブラ帝国の仕業ではないと…直感していた

それは古の書物に記されていた  
決して消えない炎によりすべてが焼き尽くされるという…  
この世界の終末を予言したものであり

兵士たちの証言からその週末の時が訪れたのではないかと  
アンナ隊長とアルフォンス王子の頭を過った…

「まさか…預言書の…。」

「とにかく…私たち特務機関が調査に向かうわよっ！」

「は、はいっ わかりました！」

アルフォンス シャロン アンナ隊長の3人は  
英雄達を引き連れてアスク王国東領へと向かったのだっ

「こ…これは…！？」

「そんな…こんなひどい状況だなんて…！？」

シャロン達の目に飛び込んできたのは  
焼けただれた木々と燃え盛る炎…  
緑豊かな美しかった光景は見る影もなく  
預言書に記されている悪夢のような光景がそこにあった

「まさか…本当に世界が滅ぶんじゃ…。」

その光景を目にしたシャロン達は  
本当に予言が現実のものとなったのではないかと考えてしまう

「…とにかく…生存者がいないか搜索するわよ。」

「ああ、特務機関の任務を忘れてはダメだ…！」

「わかりました…英雄さんたちも搜索を開始してください！」

かつては緑豊かな土地であり  
多くの人々が行き交う交通の要所でもあった…  
この炎の中に誰かが閉じ込められている可能性はゼロではない

しかし…  
同行していた英雄たちもこの光景に言葉を失い動揺を隠せない

白夜の王女「カムイ」

暗夜の王女「エリーゼ」

大いなる公女「リン」

「…こんなこと…許されません…！」

「ええ、必ずこの償いをさせてみせます！」

「誰かいるなら…早く助けてあげないと…！」

英雄たちは手分けして生存者の捜索にあたる…

しかし…炎の勢いは強く…油断すれば自分達まで炎に飲まれる可能性があった…

幸いにも英雄たちが探し回っても人影はなく  
炎に閉じ込められた民はいない様子だった

だが…その時…

「あれは…！？」

王女カムイが炎の向こうに立つ一人の少女と…大男の存在に気付いた

「あそこに…誰かいます！」

カムイの言葉にエリーゼ リンはすぐに少女の元へと駆けつけた…

「あなたたちは…！？ 来てはダメっ！」

「ほう…見慣れる者ども…只者ではないな…？」

圧倒的な迫力でカムイ達を睨み付ける炎を纏った男…

その風貌からこの炎がこの男の仕業であることは明白であった  
しかし…男と対峙する

少女はカムイ達にすぐに逃げるように必死に叫んでいた  
だが、カムイ達は少女を一人置いて逃げ出すことなどできない

「なるほど…お前たちが話しに聞く異界の英雄たちか…  
面白くなってきた、その力を見せてみよ！」



憶することなく英雄たちと対峙するスルト  
カムイ達は力のすべてを込め男に攻撃を開始した…が

「どうしてっ…攻撃が効かないっ!？」

「そんなっ…どうしたらいいのっ…!？」

カムイ エリーゼ リンの攻撃を受けてもモノともしないスルト

「その程度の技で王を傷つけることができると思うたか！」

「きゃあああああっ!!??」

スルトの攻撃を受け大きく吹き飛ばされたカムイ達…

「異界の英雄たちか…更なる戦乱が我を呼んでいるようだな。」

争いを望み、己の絶対的な力を過信しているスルトは  
部下に命じ、カムイ達を捕らえるように部下たちに命じた

「あらん、スルト様…英雄たちを連れ帰ってどうするのです？」

「ロキか…あのマクベスという男が言っていた通りなら…  
面白い事にならぬか？」

「ええ、たしかに……それでニフルの王女はどうかしますっ？」

「ふん、好きにするがいい…もはやあの娘への興味は失せたわ。」

「いえ、もったいないですわスルト様…あの王女を利用すれば  
他の英雄たちを誘き寄せる餌に使えますわ。」

「……いいだろう…任せよう。」

「はいっ〜。」

「う…うんっ…私…一体…えっ…これはっ!？」

スルトの一撃を受け意識を失っていた  
ニフル王国第二王女「フィヨルム」…

意識を取り戻すと…森の中に一人…鎖でつながれていた

「私を助けようとしてくれた方々は…どこに…？」

フィヨルムは名前も知らぬカムイ達の事を心配したが…  
周囲に彼女たちの姿はない…

炎の王国ムスペルの王スルトに追われ  
ここまで逃げ延びてきたフィヨルムだったが…  
今は自分のことよりも見知らぬ英雄たちのことが心配だった

「おっ…ようやく目を覚ましたようだな…王女様…？」

「あ、あなたたちは…？」

見るからに野蛮な山賊風の外見をした数人の男たちが  
フィヨルムの元へと近づいてきた

「ロキ様に王女様の事を頼まれてな…。」

「私の事を…？ 一体何をっ…きゃあああああっ!!!??」

「ほお、意外と良い尻をしてるんだな…王女様っ！」

「いやあ、触らないで下さいっ!？」

山賊たちはフィヨルムの体へと手を伸ばし  
尻や乳房を撫でまわし始めた…

容赦なくスカートを捲りあげ下着の上から秘部を弄ぶ男たち…

「あっ…ああああっ！！??？」

初めて男に肌を触れられたフィヨルムは動揺し恐怖で体が震えていた  
男の指が肌に触れる度にフィヨルムの体には電気が走り  
フィヨルムは体をくねらせる

何が起きているのかを頭の中で整理することもできず  
ただ男たちに体を弄ばれるフィヨルム

「この白い肌…我慢できねえ…！早くやっちまおう！」

山賊たちは久しぶりに触る女の肌に我慢の限界を迎え  
服を脱ぎ捨てると  
フィヨルムの足を抱え反り立った肉棒を強引に秘部へと押し当て  
一気に挿入させようとしてきた

「だ、だめえっ！！それはっ…いやああっ！？」

涙を溢れさせ必死に泣き叫ぶフィヨルム  
しかし…男の肉棒はフィヨルムの膣内へと一気に挿入され  
根元まで膣内へと収まっていた

「ひぎいいっ！！??？」

処女膜を貫き激しい痛みで襲われたフィヨルム  
山賊は激しい腰使いでフィヨルムの体を突きあげ  
肌がぶつかり合う音が響く…  
乳房が大きく揺れ苦痛に声を上げるフィヨルム

「あああああああああああっ！！！！??？」



いやああっ！  
お願いっ…挿れないでえっ！  
私っ初めてなんですっ…！！

カッ

下下下



「…今の悲鳴は…？」

「今のは…女の子の声だよっ！それも…カムイ様たちじゃない！」

カムイ達が連れ去られたと聞き援軍に駆けつけた異界の英雄たち…  
その中で偶然にも

「シャラ」と「ソレイユ」がフィヨルムの声を聞きつけた

「女の子が悲鳴を上げてる…すぐに助けにいかないとっ！」

男よりも女の子が大好きなソレイユはその助けを求める悲鳴を聞き  
興奮した様子で走り出していった

「……緊張感の無い…面倒な子……。」

ぶつぶつとソレイユへの不満をつぶやくシャラ  
しかし放っておくこともできず  
仕方なくソレイユの後を追って走り出していった

「この辺りから…女の子の声がしたと思たんだけど…？」

「………はあ………はあ、あなた…早すぎよ……。」

声の元へと駆けつけた二人…  
しかし、そこで見た光景に二人は啞然としてしまう

「あああああ、やめてっ…お願いいいっ！??」

拘束され男たちに犯されるフィヨルム…

「どうだ？気持ちよくなってきたら？中に出して欲しいか！？」

「いっ…いやっ…中になんて…赤ちゃんできちゃうっ！？」

「心配すんな…ちゃんと孕ませてやるから！！」





あああっ…!?  
私の…中に…っ  
いやっ…こんなのって…

溜まっていた大量の山賊の精液がフィヨルムの子宮へと射精された初体験…そして始めたの中出し…あまりにも衝撃的な出来事の連続に懸命に耐えていたフィヨルムだったが

大量の射精を受け、激しい刺激に襲われると全身を痙攣させ白目を向きそのまま意識を失ってしまった…

「お、お前ら…その子に何してるんだあっ！！」

「……………」

激怒し鬼のような形相で山賊たちに剣を向けるソレイユ  
シャラも無表情のまま内面に静かな怒りを燃やしており魔導書を構える

しかし…

「な…なに…体から力が抜けていく…？」

「こ…これは…？」

全身から力が抜け…

武器を握っていることもできなくなるソレイユとシャラ

怒りに火が付き気が回らなかったが

シャラは地面に描かれた特殊な魔方陣の存在に気付いた

「うふふふ、まんまと罠にかかってくれたわねえ？」

「ロキ様の言った通りですぜ…自分からやってきました。」

ソレイユとシャラは

フィヨルムを餌にした罠に掛かったことをようやく理解した

「それにしても…良い術を教えてくれたものね…あのマクベスという男」

「マク…ベス…？」

「それでロキ様…この女たちも頂いていいですかい？」

「欲張るんじゃないわよ、王女を抱けただけで満足でしょ？」

「そんな…話が違うじゃ…っ！うわっ…！？」

ロキと山賊たちの周囲にはいつの間にか何体もの不気味な仮面をつけた  
男たちが群がっていた



「こ…こいつらは…屍兵…??」

シャラにはその仮面をつけた怪物たちに見覚えがあった…  
屍兵と呼ばれる邪竜の手先…  
それはこの世界には存在しない別の異界の邪悪な怪物であった

「さあ、屍兵たち…この子たちを楽しませてあげてねん！」

「いっ…いやあああああっ!？」

「ダメ…こんなことっ!？」

「いやああああ、そんな…そんなところ触るなああっ!!」

全身に力が入らず逃げ出すこともできないソレイユとシャラ  
服を脱がされ背後から尻を撫でまわされ泣き叫ぶソレイユと

豊満な乳房を鷲掴みにされ全身を愛撫されるシャラ…  
恐怖に怯えた二人は泣き叫ぶことしかできない

「ひあっ…!? ダメ…私は…あの人と…!?」

しかし、屍兵たちは感情もなくただ己の性欲を満たそうと  
二人の体を弄び続ける…

「ま…待ってっ…あたしまだ処女っ…あああ!？」

「……………うっ…あああっ!」

大きく反り立った肉棒を強引にソレイユの秘部へと押し当て…  
ゆっくりと膣内へと挿入させようとする

「いっいやだっ…こ、こんなことってっ!!うあああ!!」

屍兵の極太の肉棒がソレイユの膣内へと根元まで挿入された



そしてその横で屍兵に豊満な体を撫でまわされるシャラ…

「あっ…ああああっ…!？」

全身をビクビクと震わせるシャラ  
屍兵の肉棒を目にして恐怖で体は震えていた

「あっ…ああっ? ダメ…そんな…お尻の中に…!？」

屍兵はシャラの尻穴へと肉棒を押し当て強引に挿入を開始した

「きゃああああああっ!？」

シャラの口からは今まで出した事のないほど大きな悲鳴が溢れた



きやああああっ!!  
そんなところっ!!  
いやっ!!そんな奥まで!!  
挿れないでっ!!

森の中で並んで屍兵に犯されるソレイユとシャラ  
激しい腰使いで二人を犯すその様子を笑みを浮かべて見つめるロキ

「あらん…二人とも処女だったのかしら…ごめんなさいねん…  
でも心配しないで…そろそろ効いてくると思うわ…。」

「あたしは…女の子が…好きなのにつ…！？」

得体の知らない怪物に処女を奪われたソレイユとシャラ

しかし…

「あああああっ…なににつ…体が…っ！！？」

「うっ…この…魔力はっ…！？」

「ああああっダメ…我慢できないっ…あはあああああっ！！！！」

「ひあああああああああっ！！！！？」

突然…二人の体に起きた変化…

全身が熱くなり激しく高まった性欲…

極太の肉棒が与える刺激が何倍にも高まったようだった

次の瞬間…絶頂を迎え大量の潮を吹きあげた二人…

ソレイユとシャラ自身も何が起きたか理解できずにいた

「あらん…想像以上の効果ね！」

「な…なにをしたの…私たちの体につ…！？」

シャラの言葉に不敵な笑みを浮かべるロキ…

強い魔力を感じたシャラは彼女の仕業であることに気付いた…

だが…

「あああああ、だめっ またイク… イッちゃうううっ！！！！」

魔力に耐性の無いソレイユはシャラ以上に敏感な体へと変化し

尻尾の肉棒が与える刺激に耐え切れず何度も何度も潮を噴き上げていた



「あああああ、ダメ気持ちいいよっ…女の子がいいのに…キモイっ！」

そして…

屍兵がソレイユの中で大量の射精を行うと…

ソレイユは喘ぎ声を上げながら

快楽に耐え切れず…意識を失ってしまった

「あああああっあ……ああ…。」





「あなたはずいぶんと頑張るわね？だけど二本同時ならどうかしら？」

「2本……うっ…あぐっ…！！??」

シャラの尻穴だけではなく膣内にも更に肉棒が挿入された  
激しい腰使いで同時に攻められるシャラ…

自身の強い魔力で何とか耐え続けることができていたシャラだったが  
そのあまりにも激しい快楽について限界を迎えてしまう…

「あああああっああああ！！！！??」

快楽がすべてを上回り逆らうことができなくなったシャラ  
体を揺さぶられ激しく犯され続けるその表情は  
うっすらと笑みを浮かべているようにも見えた…

「あああああっ！！熱い…体が…もうダメっ…！！??」  
シャラの子宮…そして尻穴に大量の精液が溢れ出していった





理性さえ吹き飛ばすほどの強烈な中出しに  
シヤラは全身を痙攣させたまま意識を失ってしまった

「…あらん…ちょっと強烈すぎたようね…。」

初めて使う魔法の扱いに慣れず困った表情を浮かべるロキ

「私ったらダメよね…英雄たちを支配するには…  
もっとじっくりと快樂の味を覚えさせないと…ね。」

特務機関に更なる敵が出現し…  
英雄たちに新たなる危機が訪れようとしていた…

# Episide 01

## ムスペル王国 王城

「見事ですな、スルト王！

まさかこんなに早くカムイ王女を捕らえてくるとは…。」

「ふん…異界の英雄といえどこの程度…拍子抜けしたものだ。」

スルトと話し喜びの声を上げているのは  
かつてカムイ王女が暮らしていた暗夜王国  
ガロン王の側近であった「マクベス」…  
彼もまた異界からこの世界にやってきた者であった

「貴様の言う通り…これで更なる戦乱が訪れるのだろうか？」

「もちろんですとも！

私の術でカムイ王女を操り…特務機関の英雄たちを混乱に陥れて  
御覧に入れますっ！

強い絆で結ばれた英雄たちは  
必ずやスルト王に強い怒りを抱くはずですよ ！」

「…ふむ、手段は気に入らんが更なる戦乱が訪れるのならそれでよい。」

マクベスは姑息な手段で英雄たちを追い詰め  
スルト王の望む戦乱の世を実現すると熱く語った…  
だが…純粋な力を信じているスルト王にとっては  
マクベスのような手段を採らない卑怯なやりを好まない

しかし、異界の英雄たちの怒りを自分に向けさせるという目的は  
戦いを求めるスルトに実に好都合であった

「ところでマクベスよ…

お前はあのカムイという娘と何やら因縁があるようだな？」

「ええ…まあ…、宿敵とでもいいでしょうか…

今度は決して解けぬ術で永遠に私の僕にして差し上げます。」

かつて別の異界にて大きな争いが起きた際…  
カムイ王女には何度も出し抜かれてきたマクベス…  
洗脳し思うままに操ろうとしたこともあったが…  
兄弟姉妹達の強い絆により術を破られたこともあった…

「…好きにするがよい、しかし貴様の話しが嘘であったならば…  
容赦せぬぞ？」

「ひいいっ…！？ し、心配はいりません、様々な異界を渡り歩き…  
私の術は数段進化しております！！」

スルト王に脅され怯えるマクベス  
失敗は許されない状況であったが  
マクベスは己の磨いた術に絶対の自信を持っていた

「…ここは一体…エリーゼとリンさんは？」

スルトにより捕らわれたカムイは  
目を覚ますと、鎖に繋がれどこかの倉庫のような建物の中にいた

共に捕らわれたはずのエリーゼとリンの姿はなく…  
意識を失ってからどれだけの時間が経過したのかもわからない

「はやく…ここを抜け出さないとなっ…！？」

新たな争いが始まろうとしていることに気付いたカムイ  
そして何より、カムイ達の攻撃でビクともしなかったスルトの存在…  
一刻も早く特務機関に状況を知らせようと懸命に脱出を図る

「おやおや…王女ともあろうお方がはしたない…。」

「きゃっ…あなたは…マクベスっ…！？ どうしてここにっ！？」

突然目の前に現れたマクベスの姿に驚きを隠せないカムイ

「これは…あなたの仕業なのですか…！？」

「とんでもない…私はスルト王にお仕えし…  
望みをかなえようとしているだけですよ…。」

カムイはスルト王を裏でマクベスが操っているのではないかと考えた  
しかし、あの圧倒的な力を持ったスルト王を操るなど不可能にも思える

「あなたの狙いは…目的はなんなのですかっ！？」

「…あなたへの復讐でしょうか…今度こそあなたを完全に洗脳し  
支配してみせましょう！」

高笑いするマクベスの背後から…

カムイの良く知る二人の少女がゆっくりと姿を見せた

「エリーゼ…リンさんっ！？ どうしてっ！？」

カムイの目の前に現れたエリーゼとリンの二人…

だが…二人は半分裸の状態で乳房や秘部を堂々とさらけ出していた  
しかも…少しも恥じらう様子を見せず  
その瞳からは理性が失われているように見えた

「さあ、エリーゼ リン…私のモノを啜えなさい…。」

「はい、マクベス様…！」

「喜んで…！」



カムイの目の前でマクベスの肉棒を夢中でしゃぶりだす二人…

「や…やめて…一体どうして…二人に何をしたのっ!？」

「二人は望んでこうしているのですよ…あなたも…いずれこうなる…。」

「…!!？」

カムイが目を覚ます数時間前…

囚われたエリーゼとリンは王都の広場にいた…

「いやあああつ、離してええっ!!」

「やめなさいっ…エリーゼさんを離して!!」

「あらん…王女様たちそんな顔してないで…  
これから楽しいことが待っているのよ？」

泣き叫ぶエリーゼとリン…そしてその傍らには  
不気味な笑みを浮かべるロキの姿があった

「一体…私たちをどうする気なのっ…!？」

「うふふ…それはね…。」

ロキが杖を高く上げると  
轟音と共に異界の扉が開き…その闇の中から  
何体もの異形の怪物が姿を現れたのであった  
しかもその怪物たちは…股間の肉棒を反り立たせ  
二人の姿を見て激しく興奮している様子であった

「ひいっ!？」

「な…なんなの…!？」

「さあ、…この王女様たちがお前たちの相手になってくれるよ！」

ロキの合図とともに召喚された怪物たちは  
エリーゼとリンへと襲い掛かる

「いやああああっ!？」

「ひああああああっ!？」

「いや、離してっ…!？」

異形の怪物に捕らわれたリン…  
下着を引き裂かれ…両足を抱えられたリン

隠すものがなく丸出しとなった秘部…

「い、いやあ見ないでええっ!!??」

周囲に集まっていたムスペルの民たちはその光景に釘付けになる…  
そんな大勢の視線が集まる中で…  
怪物の肉棒はすぐにリンの膣内へと入り込もうと  
ぐいぐいと秘部に押し付けられ今にも挿入されそうになっていた

「ひゃああっ!？ 無理っ…こんなの入らないっ!？」

極太の肉棒に怯えるリン…

「私…まだ経験がっ…!」

処女を奪われる恐怖と絶望…

しかし…肉棒は膣壁をこじ広げ

じわじわとリンの膣内へと入り込んでいったのであった





ヒッ

ズズズズズ

ひぐっ…!!  
無理よっ…!  
こんな太いに入るわけ…っ  
あっ…あぐっ!!

「あああああああっ!？」

しかし…その時感じたのは…苦痛ではなく快感…  
自分でも驚くほどすんなりと入り込む肉棒と  
受け入れてしまっている自分がいた



「リンお姉ちゃんっ…ダメ やめてえっ！」

「あらん王女様…他人の心配をしている場合かしら？」

「ひっ…そんなっ…ノスフェラトゥ…！？」

エリーゼに迫るノスフェラトゥ…  
怯えるエリーゼは足がすくみ逃げ出すこともできなかった

「きゃああああっ！？」

ノスフェラトゥに押し倒されたエリーゼ…  
下着を引き裂かれ丸出しになった尻を  
大勢の男たちが凝視し興奮していた

「いやああっ、こんな大きいの…入らないよおっ！？」

ノスフェラトゥの肉棒が秘部に押し当てられると…  
その圧倒的な大きさを実感してしまう…

しかし…エリーゼの秘部からは  
いつの間にか大量の愛液が溢れ出しており  
不思議な程に体が熱く…興奮する気持ちを抑えられない…

「なんなの…私どうなって…！？ あああああああっ！？」

ノスフェラトゥの肉棒がエリーゼの膣内へと  
強引に押し込まれていった



リンもエリーゼも自分の体の異変に気付いていた

処女だったはずなのに…

苦痛もなく快感だけが押し寄せてくる自分の体…

二人の傍らで笑みを浮かべるロキ…

彼女が何かしたのだと確信したリンは必死で理性を保とうとするが…

「あはぁあぁあっ…ダメっ…気持ちいいよおっ!!!」



ノスフェラトゥに犯されるという現実から逃れる為か…  
エリーゼはすぐに快樂を受け入れ身を委ねてしまっていた

「あらん、エリーゼ王女…そんなに気持ちいいのかしら？」

「ああああっ！！ うんっ！！気持ちいいっ！！！！」

「よかったわ…これからもっと気持ちいいことしてあげるわね…？」

「あっ…はいっ……ああああああっっ！！！！??」



ノスフェラトゥの肉棒から大量の精液が射精されると…  
エリーゼは広場の隅々にまで届くほどの喘ぎ声を上げた…

大量の精液で腹部はみるみる膨らみ…  
逆流した精液が勢いよく吹き出した

「あらん…リン王女…どうしてそんな抵抗しているのかしら…？」

「うっはあああっ！？ 私は…私は…っ！？」

激しい腰使いで攻められ秘部からは大量の愛液が溢れ出していた  
必死に耐えてきたリンだが…  
目は虚ろになり意識は朦朧としているようだ

「抵抗なんてしなくていいのよ？ みんなで気持ちよくなりましょ？」

「うっ…抵抗しなくて…いいのっ…？」

「そう…力を抜いて…身を委ねてみなさい…？」

「は…はいっ…あああっ！？ こんな…こんな気持ちいいなんてっ…！」

ロキに言われるまま力を抜いてしまったリン…  
その瞬間、大量の潮を噴き上げてしまった

体を痙攣させ喘ぎ続けるリン…

「あらあら…こんな大勢の前ではしたないわねえ…いけない王女様ねえ！」

「あっあああああっ！！私はっ…はしたない…王女ですっ！？」

数分前のリンには考えられない発言であった  
快楽に身を委ねもはや引き返すことのできなくなったリン

「ああああっあああああっ！！！！！！」





あはああん!?  
お願いっ…もっとなんか…  
もっとなんか出してええ!?

怪物の強烈な中出しを受け大きな喘ぎ声を上げたリン  
リンの腹部は一気に妊婦のごとく膨らみ  
周囲の人々を驚かせる

「くくく…見事でしたよロキ殿…。」

「…マクベス殿…ずいぶんと奇妙な術をお持ちですわね…。」

「エリーゼ…リンさん…しっかりしてくださいっ！！」

「カムイお姉ちゃん見つけたっ！早く一緒に気持ちよくなるろうよ？」

「抵抗しても無駄ですよカムイさん！」

「そんな…一体どうして…！？」

「何を言っても無駄ですよカムイ王女…  
私の術は以前とは一味違います！」

「マクベス…よくも二人を…。」

「さあ、エリーゼにリン…カムイ王女をお連れしなさい…！！」

「はあ〜い！」

「はい、マクベス様！」

「いや…二人とも…やめてえっ！！」

エリーゼとリンに服を脱がされてしまったカムイ…  
豊満な乳房にスレンダーな体…  
大事な場所を露出したまま二人に倉庫から連れ出されるカムイ

「な…なんで…いやっ…見ないでえっ！？」

倉庫の外には大勢の男たちがカムイの登場を待ちわびていた…

全裸で登場したカムイに歓声の声を上げその体へと手を伸ばし…  
乳房や尻を撫でまわし始める…

「いやあ、触らないでえっ！」



涙を浮かべ叫ぶカムイ…

しかし…その横で男たちに体を触られ嬉しそうな笑みを浮かべる  
エリーゼとリンの姿があった

その姿を見ていると…抵抗している自分のほうが異常なのではとさえ  
思えてくる…

「じゃあ、みんなっ！カムイお姉ちゃんを抱いてあげてっ！」

エリーゼの言葉で男たちはカムイの体へと群がり  
容赦なくその秘部に肉棒を挿入したのだった

「あああああああああっっっ！！！！??」



突然、見知らぬ男に肉棒を挿入され驚き悲鳴を上げるカムイ…  
男たちは少しも遠慮することなくカムイの体を抱く…

「いやああっ！！やめてっ…そんな…激しくっ…！？！？」

激しい腰使いで攻められ抵抗することもできないカムイ

「ああああっああっ！！ 体がっ…おかしいよっ…！？」

処女を奪われた絶望よりも  
自分の体が肉棒に激しく反応し快楽を感じていることに驚いてしまう

それがマクベスの仕業であることはわかっていた…  
エリーゼとリンのように自分も墮落させようとしていると…

「ああああっ！！！！？」

それは解っている…しかし  
男の激しい攻めに体が自然と反応し喘ぎ声が漏れてしまう…

「ほら、やっぱりカムイお姉ちゃんも好きなんだねっ！」

男と繋がった秘部から大量の愛液が溢れぐしょぐしょに濡れている

「ち…違う…エリーゼ 私は…っ！？」

必死に否定するカムイだったが…  
エリーゼの言葉通り…体は快楽に素直な反応を見せていた

「カムイさん…ほら、体は正直ですよ！」

エリーゼとリンはカムイの周囲で男たちに抱かれながら  
この状況を楽しむようにと語ってくる

最初は何とか理性を保ち…  
マクベスの思い通りにならないように必死に耐えていたカムイだったが  
カムイの体を侵食していくマクベスの秘術はついに  
その精神まで犯し始める…





エリーゼ リン マクベス そして大勢の男たちに囲まれた中で…  
激しい射精を受け喘ぐカムイ

そして…

いつの間にかカムイは周囲の男たちの肉棒を自ら啜えだし  
溢れる精液で喉を潤しはじめていた…

広場でカムイ…エリーゼ…リンと男たちによる宴は続く…

「素晴らしい…私の秘術は完璧だ…

あのカムイ王女をここまで墮落させるとは…！！」

マクベスが異世界を渡り歩き編み出した秘術は  
完璧ともいえる洗脳状態に追い込みことができた…  
しかし、その洗脳を完全なものにするためには  
対象を極限まで追い込む必要がある…

仲間を引き付け導く英雄の力を持ったカムイを洗脳するには  
その仲間達から墮としていくのが最善であったのだ…

スルト王の戦乱を求めた行動は幸運にも  
マクベスが望みをかなえ復讐を遂げるために最適な状況であった

しかし…そんなマクベスを…ロキはどこか冷めた目で見つめていた

「……下衆な男…。」

スルトの命令により協力を惜しまないロキであったが  
マクベスのやり方はスルト同様に気に入らないようであった



# Episide 02

「う…んっ…。」

「あ、目を覚ましたよっ！？」

炎の王スルトに敗北した  
ニフルの第二王女「フィヨルム」は  
シャロン達により助け出され特務機関本部で目を覚ました

「すみません…関係の無い皆様を巻き込んでしまって…。」

自分の窮地に訳も聞かず助けに入ってくれた英雄たち…  
カムイ エリーゼ リンたちが行方不明になったことを聞かされ  
深い悲しみに満ちた表情を浮かべるフィヨルム

「カムイさんたちのことは心配ですけど…私たち特務機関ですから！」

「そう、困っている方を見捨てることなどできない。」

落ち込むフィヨルムを励ますアルフォンス王子とシャロン王女

フィヨルムによれば

アスク王国の隣国である氷の国「ニフル」は  
ムスペル王国からの侵略を受け…ほぼ壊滅状態だという…

「そんなっ…私たち全然気づかないなんて…。」

国内の争いに気を取られ  
隣国の危機を見過ごしてしまったことを後悔する  
特務機関もアスク王国軍も決して怠けていたわけではなく  
エンブラ帝国との戦いが長引き  
他国の心配をしている余裕が無かった

「いえ、気付かないのも無理はないかと…。」

フィヨルムの話しではムスペルが侵攻してきたのは  
最近のことであり  
抵抗する暇もなく、瞬く間に滅ぼされてしまったのだという



改めてムスペルの王「スルト」の恐ろしさを知った特務機関の面々…

「…特務機関の皆様…お願いですどうか私に力を貸してください！」

「もちろんです！私たちが力になります！！」

「ああ、それにスルト王の次の狙いは間違いなく  
我がアスク王国だ…。」

特務機関の面々はフィヨルムに全面的に協力することを決めた…

しかし…

アンナ隊長やアルフォンス王子の胸には大きな不安もあった

ムスペル王国との争いが始まってから  
国境の防衛に送り出した英雄たちの一部と連絡が取れなくなっている  
心優しいシャロンや国を滅ぼされたばかりのフィヨルムに  
不安な気持ちを抱かせない為に黙っていたが  
ムスペルとの戦いは大きな犠牲を生むのではないかと…  
二人は不安な気持ちを脱ぐことができなかった

「え、フィヨルム王女のお姉さんの夢を？」

「はい…夢の中で…たしかにニフルへ来るように…と。」

「…スリーズお姉さまが…ご無事だといいいのですが…。」

特務機関の中心人物である召喚士が夢の中で  
フィヨルムの姉スリーズからのメッセージを受け取ったという  
ニフルにはアスクと同じように特殊な伝承がいくつも残されており  
そこに無敵のスルト王を倒す手段が隠されている…と  
スリーズは召喚士に伝えたのだという

「お姉さまが伝えたいこと…きっと大切なことだと思います！」

「私もそう思います！」

「きっとスルト王を倒せる術が見つかったんですよ！」

「うん…その可能性は考えられるけど…」

アルフォンスとアンナ隊長は決断を迫られていた  
スルト王を倒す術が本当にあるのならば…  
何としてもスリーズを探し出さなければならない…

しかし…それは敵の占領下にある領地に潜入する必要があり  
大勢の英雄たちを連れていくことはできない…  
そしてもちろん…特務機関にとって最大の切り札でもある  
「召喚士」を危険な目に合わせるなどできない…  
召喚士を奪われてしまえば…  
アスク王国は完全に敗北してしまうだろう

「私も行ったほうがいいのでは…？」

スリーズに夢で呼びかけられた召喚士は  
共に行くべきではと主張した…  
しかし…

「いえ、あなたは念のために安全な場所にいて。」

「もしスリーズ王女を見つけ出すことができれば、  
すぐに連れてくるよ。」

「ですが…そんな少数で向かうなんて…危険すぎます！」

フィヨルムと共にニフルへ向かうのは…  
アンナ隊長、ルキナ エイリーク 総勢4名…



「敵の注意を引かないためには…これ以上の団体行動は避けないとね。」

「心配いりません、私たちが必ずスリーズ王女を助け出してみせます！」

「女の子だけのほうが敵も油断しますしね。」

「みなさん…よろしく願いします…！」

フィヨルムと共にニフルへと向かう一行…

そこに…想像を超えた悪夢が待ち受ける…

数日かかりでニフル王国とアスク王国の国境を超えた一行  
敵を警戒し慎重に進んだため  
予定よりもかなり時間がかかってしまった

「変ですね…ここがニフル王都へと続く街道なんですけど…」

奇妙なことに街道には敵の兵士の姿はほとんどなく…  
誰もいない静まり返った街道がただ続いていた

「…これって怪しすぎるわね…。」

「ええ、怪しいです。」

「罨でしょうか…？」

「えっ…罨なんですかっ！？」

ムスペル軍は既にニフルを離れアスク王国侵略に乗り出している  
そのためニフルに残っているのは僅かな占領軍であるために  
街道の警備まで手が回らない可能性も考えられる…

また、スルト王の圧倒的な力で敵を打ち倒していく性格を考えると

「これは…チャンスね…進むしかないわ！」

アンナ隊長はこのまま進むことを決め、他の英雄たちもそれに同意した

「うわあ、ここがニフルの王都ですか…。」

氷のような立派な城に思わず見とれてしまう英雄達…

「お姉さまが隠れているのは…

おそらく小さい頃から遊び場にしていた教会かと思います。」

街は敵の兵士に占領され厳しい監視下にある…

王城も敵の部隊が駐留しており

スリーズが隠れているのは

教会の地下であるとフィヨルムは確信していた

小さな頃から街中を遊び場にしていたフィヨルムの案内により  
一行は路地裏を抜け、目的の教会まですぐに到達することができた

「この教会の地下に…？」

「ええ、地下はかなり広い構造になっていて…入り組んでいます。」

「全員で乗り込むのは危険ね…ルキナはフィヨルムと同行して。」

「わかりました。」

「私とエイリークは隠れて教会の周囲を監視するわよ。」

「了解です！」

フィヨルムはルキナと共に…裏口から教会内部へと潜入した…  
するとそこには…

「あら、フィヨルム…よく来てくれたわね。」



教会の中にはスリーズの姿があり  
フィヨルムとルキナを笑顔で迎えたのだった

「この方がスリーズ王女…なぜここにっ!？」

あまりにも堂々と教会の中に立ち、隠れもしていないスリーズ  
その姿にルキナだけではなくフィヨルムも警戒してしまう

その時…ルキナとフィヨルムの背後の扉が勢いよく閉まり  
二人は教会の中に閉じ込められてしまった

「やはり…これは罠ですっ！」

「そんなっ…お姉さまが…私たちを騙したの…？」

「ごめんなさいフィヨルム…あなたもすぐに理解してくれるわ。」

「ルキナさん…あの扉から地下に行けます…逃げて下さいっ！」

「そんな…フィヨルム王女を置いてはいけません…!？」

「アンナさんに…すぐに知らせてくださいっ！」  
私は…お姉さまを正気に戻してみせます!!」

フィヨルムの強い決意を感じ取ったルキナは  
この危機を仲間に知らせるために地下室の階段を駆け下りていった

「あら…友達に逃げてしまったのね…  
一緒に楽しもうと思っていたのよ？」

「楽しむ…? お姉さま…一体何が…っ…えっ!!!？」

スリーズの背後から大柄のスキンヘッドの男が現れ背後からその  
豊満な体を抱きしめた

「あんっ…ガンズさま…妹の前なのに…。」

「ふふふ、今回はマクベスについてきて正解だったな…。」

その男は暗夜王国に所属していた戦士「ガンズ」  
ガロン王の命令でカムイ暗殺を図るなど  
様々な悪行を繰り返してきた男であり  
本来ならばスリーズが嫌悪するはずの男であった…だが

スリーズの乳房を驚掴みにし激しく揉み出すガンズ  
笑顔を浮かべてガンズと激しく舌を絡めるスリーズ…

「や…やめて…お姉さまどうしちゃったの？」

「うふふ、マクベス様が本当の自分を気付かせてくれたのよ。  
心配しないで…あなたもすぐに一緒に楽しめるようになるから…  
今はそこで私をじっと見ている…！」

「きゃあっ…やめてっ…離してっ！！？」

どこからか湧いてきた屍兵に取り押さえられるフィヨルム…  
そして…

スリーズは拘束されたフィヨルムの目の間でスカートを捲り上げ

「ああ、ガンズ様…はやくその太いもので私を…っ！！」

「よし…妹にたっぷりと見せつけてやろうじゃねえか！」



ああっ!!  
見てフィヨルム!  
私の中にこんなに太いものが  
入っているわ!!



「あっはああああんっ!?!??」

ガンズに押し倒されたスリーズ…  
極太の肉棒が膣内へと一気に挿入される

「お…お姉さまっ!?!」

激しい腰使いで攻められ乳房を大きく揺らすスリーズ  
笑顔で喘ぐ姉の姿を見てフィヨルムは言葉を失ってしまう

「あああすごいわっ!見てフィヨルムっ!!」

「どうだっ! お前の姉はこんな淫乱な女だったんだぞ!?!」



目の前でガンズと姉のセックスを強引に見せられるフィヨルム…

不快悲しみと同時に…

姉をこんな姿にさせたスルト王への強い怒りが湧いてきたのだった…

「あああああっガンズ様あっ！私の中に…出してくださいっ！！！」

「ほら見ているっ！お前の姉を孕ませてやるぞっ！！」

「あはあああああああっ！！！」



ガンズの強烈な射精を受け喘ぎ、体を痙攣させるスリーズ  
変わり果てた姉の姿に何も言えず  
全身から力が抜けてしまったフィヨルム



「はぁ…はぁ…フィヨルム王女は無事でしょうか…。」

フィヨルムに仲間たちに知らせる為に逃がされたルキナ…  
王女を一人置いてきてしまったことを深く後悔していたが  
アンナ達と合流すればまだ助け出すチャンスは必ず来る…  
そう信じてルキナは地下道を進み続けていた

「地下道…というよりここは…地下牢みたいですね。」

教会の地下に広がる地下道…

そこは古い時代に使われていた牢獄らしく  
年季の入った檻や鎖があちこちに散乱していた

「こんな場所から早く抜け出さないと……えっ…誰か…いる？」

地下道の奥に何者かの気配を感じ取ったルキナ…

神剣ファルシオンを構え…その正体を伺うと…

「こ…こいつはっ!？」

ルキナの目の前に現れたのは…巨大な竜族…

邪竜ではないが正気を失っているらしく…

ルキナの姿を見ると

激しい雄たけびを上げ勢いよく向かってきたのであった

「こんなところで竜族に遭遇するなんてっ…!？」

ルキナの持つ神剣ファルシオンは竜族に対して絶大な効果を持ち  
単体の竜族であれば凄腕の剣士であるルキナの敵ではない…はずだった

「うっ…な…なにっ…これはっ!？」

間一髪のところでは竜族の一撃を交わしたルキナ

「か…体が重い…どうして…何かがおかしい…!？」

いつもなら素早い身のこなしで交わすことができるはず…  
だが、ルキナの体は自分でも驚くほどに自由が利かなかった…

「それに…なんだか体が熱い…っ…どうして胸が高鳴る…？」

英雄達がこの地下道を利用することを想定していたマクベスは  
この場所にも秘術により罫をしかけていたのだった  
しかも…ルキナを見て興奮している竜族…

その股間からは巨大な肉棒が伸びルキナの体を求めていた

「な…なんで…こんなことありえないっ…！？」

竜族の見たことの無い肉棒の姿に戸惑いを隠せないルキナ

「いやああっ来ないでええっ！！！？？」

動揺したルキナはより動きが鈍くなり  
迫る竜族から逃れることができない

「いやだあっ！離してっ！！！」

いとも簡単に竜族に捕まってしまったルキナ…  
そして…

「な…何をやる気…っ…そんなつまさかっ！？ きゃあああっ！？」

服を引き裂かれ下半身丸出しになったルキナ…

竜族はルキナの秘部に狙いを定め…  
ルキナの体を抱え強引に肉棒を秘部へと押し当て挿入させようとする

「だめええっ！！！！いやっ…入ってきてるうっ！！！！？」





いやああ!?  
竜に犯されるなんてっ  
ダメッ!  
中に…入ってくるううっ!?

「あああああっああっ!!!!???'」

竜族の巨大な肉棒の先端がルキナの膣内へと入り込んできた  
膣壁を押し広げながら…  
肉棒は次第に膣内の最深部にまで到達した

「あっ…あががあっ!!!!???'」

体がガクガクと痙攣し小振りな乳房が小刻みに揺れる  
そのあまりの巨大さにルキナの腹部は肉棒の形にぷっくりと膨れていた

竜族はルキナの体を抱え人形を抱えるように激しく  
上下に揺さぶり交尾を開始する



肉棒が膣壁を激しく擦り付け激しい刺激が押し寄せる

「なん…でっ…気持ちいいっ…!!!?」

竜族に犯され弄ばれているというのに…  
ルキナの体は快樂を感じ興奮が収まらなかった

自分でも理解できない不思議な感覚…  
抵抗することもできず…その感覚のまままだ竜族に犯され続ける

「あっ…ああああっ…!!!????」

そして竜族はルキナの子宮へと大量の射精を開始し…  
子宮に溢れていく精液に腹部はどんどん膨らんでいった





ぐったりと全身から力が抜けていくルキナ

「あっ…あああ…あがっ……！？」

竜族はルキナをかかえたまま更に交尾を続けようとその体を揺さぶる

「あっ…あ…ダメ…もう…気持ちよすぎて…おかしくなり…ます…。」

竜族に連れ去られていくルキナの表情は…笑みを浮かべていた…

その頃…教会の前を見張っていたアンナとエイリーク  
中で何が起きているのかわからなかったが  
あまりにも遅く何の合図も無いことから  
異常事態が発生したことを察知していた

「まずいわ…きっと何かあったのよ…。」

「つまり…罠だったの…？」

「おそらく私たちの身も危険だけど二人を放っておくことはできない。」

二人は教会の中で何が起きているのかを確かめるべく…行動を開始した  
しかし…

身を隠していた二人が姿を見せた途端…  
そこに異界の扉が開き…そこから何体ものノスフェラトゥが出現した

「そんなんっ、やはり罠だったのっ！？」

「こんなにたくさん…一体どうしたら…！？」

ノスフェラトゥに群れに囲まれたアンナとエイリーク…  
ここから逃れるにはこいつらと戦う以外に道はないと思われた

「おらん、英雄さんおたつて本当に…用った通りに動いてくれるのね、」







背後から肉棒を強引に挿入されたエイリーク  
両足をガクガクと震わせ今にも倒れそうなほどに追い詰められていた

「ああああ、だめっ!!!奥に…当たってるっ!!!」

肉棒が大きく子宮を押し上げる

エイリークの傍ではアンナもノスフェラトゥに犯され  
大量の潮を噴き上げ叫んでいた

「ああ、エイリーク王女…はしたないですわ…こんなに漏らして。」

「あっ…あああああっ！！！！??」

「あらん、気持ちよくて喘ぎ声しか出せないのかしら…？  
やっぱり気に入ってもらえたみたいねえ？」

「あっ…はいっ…うっすごいっ…きもちいいですっ！！！」

「どう？もっと気持ちよくなりたいでしょ？  
私の言う事…どんなことでも聞いてくれるなら…。」

「はいっ…どんなことでも…言う通りにしまっ…すっ！！！」

「いい子ね…なら…もっと激しくしてあげるわ。」

「あああああっああっ！！！！！」

ロキの合図と共にノスフェラトゥはさらに腰を激しく振り始める  
エイリークは今まで見せたことのない快樂の表情を浮かべ  
幾度も潮を噴き上げイキ続けた

「うあああああっ！！」





うあああつ！  
気持ちいいですうっ！  
もっ…私の中に  
注いでくださいいっ！?

大量の射精を中出しされ腹部をぽっこりと膨らませたまま  
倒れるエイリークとアンナ…

全身に精液が染みつき  
溢れ出した精液が秘部から溢れ出していた…

カムイ達だけではなく…  
スリーズまでもその支配の元に置いていたスルト王とマクベス

# Episide 03



アンナ隊長がフィヨルムと共にニフルへと向かって数日…

特務機関本部ではムスペル軍との戦闘で行方不明になった英雄たちの捜索が続いていた

「お兄様…やはり英雄さんたちの姿はどこにもありませんでした。」

英雄たちの捜索を終えたシャロン達が無事に帰還するも  
手がかりすら得ることができなかつた為か  
その表情はかなり暗く  
特務機関本部にも重い空気が流れていた

「そうか…ご苦労だったねシャロン、ラーチェル王女 ミルラ。」

シャロンと共に英雄たちの捜索に向かったのは  
エイリークと共に召喚された二人の少女…

ロストン聖教国の王女 **ラーチェル**  
竜神族 マクムートの **ミルラ**

英雄達を治療する回復の呪文を得意とするラーチェルと  
翼により空からの偵察と捜索ができるミルラが  
英雄達をくまなく探したのだが

行方不明となっているアイラやリンダといった英雄たちは  
発見することができなかつた…

「残念ですが…英雄たちの痕跡さえ発見できませんでしたわ…。」

「ごめんなさい…お役に立てなくて…。」

「いや、君たちのせいじゃないよ 今はゆっくり休んでくれ。」

行方不明となった英雄たちの手がかりすら発見できず  
特務機関は混乱状況に陥っていた

新たな被害者を出すリスクを避けるため  
これ以上の搜索や偵察に英雄を出すことは避けたい

しかしそれでは完全にムスペル軍の後手に回ることになり  
事態の解決は遠くなるばかりであった

打つ手のないままアンナ隊長とフィヨルムからの連絡を待つしかない  
特務機関の面々だったが…  
そんな時…

「お兄様っ！行方不明だったミカヤさんが戻ってきましたっ！」

「えっ！？それは本当かい！？」

一週間ほど前…前線で行方不明となったミカヤが突然  
特務機関本部へと帰還した

「ごめんなさい、皆様に心配をおかけして…。」

「ミカヤさん、ご無事で何よりですっ！」

ミカヤの帰還を喜ぶ特務機関の英雄たち…  
アルフォンスはミカヤの無事な姿に安堵しながらも  
彼女に何があったのかを聞き出そうとする

「ミカヤさん、一体何があったんだ…？」

「…それは…。」



ミカヤの話しでは…

ムスペル国王スルトはエンブラ帝国のヴェロニカ皇女とも手を結んでいるという…

そしてヴェロニカ皇女の英雄たちを従わせる特殊な力を用いて英雄達を捕らえて手駒にしようと企んでいるのだという…

「…まさかヴェロニカ皇女が…スルトと手を組むなんて…。」

ただでさえ苦戦してきたエンブラ帝国と

圧倒的な軍事力を持つムスペルが手を結んだとなれば…

アスク王国にとって最大の危機となる

ミカヤは敵に捕虜にされ従うフリをしながら何とか危機を抜け出し特務機関へと命からがら戻って来たと語った

「事情はよくわかった…大変な目に合ったね。」

「ミカヤさんお疲れでしょう？今はゆっくり休んでください！」

「ありがとうございます…アルフォンスさん シャロンさん。」

「よかったですわ…ミカヤさんが無事に戻られて…。」

「……………」

ミカヤの帰還を喜ぶラーチェルと…その横で無言のままのミルラ

「…どうしたのですか…ミルラ…？」

「あ…あの……、何か…ミカヤさんからおかしい魔力を感じました。」

「……ミカヤさんから…？」

「はい…間違いありません…！」

マクムートとして他の人間とは違う能力を持つミルラ…

「はぁ…さびしい…異界に来て俺は城で留守番か…。」

特務機関の砦の見張り台の上で独りで空を見つめていたのは…  
異界の重戦士…「アーダン」

異界 シアルフィの騎士  
固く強い戦士であり  
防衛戦においては最大の活躍を見せるのだが…  
重騎士である故に歩みは遅く  
遠征での戦いには不向きということで  
元の世界でも常に城の防衛を任されてきた…  
この世界においてもその防衛力を評価され  
特務機関の防衛隊長を任されていた…

「はぁ…せめてアレクみたいに追撃ができれば…。」

「アーダンさん任務ご苦労さまです。」

「えっ…あぁっ！？ミ…ミカヤ殿っ??」

突然目の前に現れた銀の髪の乙女「ミカヤ」の姿に動揺するアーダン

「…あっ、ゆ…行方不明だと聞いておりましたが  
ご無事のようにでな、何よりです！」

「ありがとうございます…。」

見張り台になどやってこない美少女の姿は新鮮であると同時に  
異様な光景にも思える…  
慣れた場所であるはずなのに異常な程に緊張し  
汗が溢れて止まらなくアーダンだった

「それで…またどうして見張り台などに…？」

「それは…アーダンさんにお会いしたくて…。」



その言葉に耳を疑うアーダン…  
いつか言われてみたいと思っていたセリフであったが  
いざ現実はその言葉を聞かされると  
何と返答したらいいのかわからなくなる

「さあ、任務お疲れでしょう？少し横になってください。」

「えっ…いえ…自分よりミカヤ殿のほうがお疲れでは…あっはい…でわ。」

帰還したばかりのミカヤの体のほうが心配であったが  
座るように促され断ることもできなかった

「えっ…ミカヤどの…あの…!？」

アーダンの隣へと座ったミカヤはアーダンの手を握り…  
そして…股間へと手を伸ばしてきたのだった  
言葉を失い戸惑いを隠せないアーダン…

「初めて会った時からこうしたかったんです…いいですよね？」

ミカヤはアーダンの股間へと顔を埋め…  
肉棒を口に咥えてしゃぶりだしたのであった

美味そうに…夢中で肉棒を味わうミカヤ…  
それは異界で銀の髪の乙女と呼ばれた姿とは  
まるで別人であった…

「さあ、私たちひとつになりましょう…！」

「あっ…ああ…まさかこんな…異界に召喚されてよかった…。」

「あっ…あああ…すごい大きいですっ…！」



ああ…すごいっ！  
こんなに太いのっ初めてですっ！

アーダンの上に跨り…

躊躇することもなく肉棒を膣内へと挿入させたミカヤ

アーダンは頭の中が真っ白になり

明らかに異常なミカヤの行動に気付くことができない

激しく腰を振り喘ぎ身を悶えるミカヤ…

「あはあんっ！奥まで入ってきてます…！！」



頬を赤く染め笑みを浮かべるミカヤ…  
本来の彼女ならば…出会ったばかりの男と寝るなどありえない…  
しかし今のミカヤはどんな相手とでも寝る…  
そんな淫乱な女の雰囲気醸し出していた

「あっ…あああダメ…イク…イっちゃいますう！！！」

「う…俺も…出ちゃいますっ…！？」

「ああ、中に…出していいですよっ！！出してくださいっ！！！」



二人きりの見張り台で…激しく求めあった二人…

「はあ…はあ…これで大丈夫…もうあなたもマクベス様の僕ですよ。」

ミカヤとセックスを終えたアーダンの目つきが変わった  
ミカヤを通じ…強力な魔力の力が流れ込んでいた…

「…そんな…ミカヤさんがあんな真似を…!？」

「…うう…やっぱり…強い魔力を感じました…。」

ミカヤの様子がおかしいことに気付いたラーチェルとミルラ…  
二人はこっそりと彼女の後を付け  
その行動を監視していた…  
しかし…まさかこんな過激な行動に出るとは想像もできなかった…

「は…はやくみんなに知らせないと…？」

「そ…そうですね…急いで…だけど騒がずに…。」

ラーチェルは騒ぎを起こさずに事態をアルフォンスに伝えようとした  
ミカヤが何らかの力により操られていることを確信したため  
彼女の淫乱な行動が公にならないように気を使った為であった

アルフォンスへと知らせに向かう際…何人かの英雄たちとすれ違うが  
平静を装い歩き続けた…

だが…

「あら…ラーチェルさんにミルラさん、何をするつもりなのかしら…？」

二人の行く手を遮るように…  
ミカヤとアーダン…



「そ…そんな…こんな大勢…。」

「ど…どうしよう……。」

「今は…逃げるしかないですわ…！」

操られているミカヤ達を傷つけることもできず  
二人はひとまず他の英雄たちが集まる広間を目指し走り出した

しかし…二人の進む道はすべて操られた兵士たちにより監視されており  
二人は次第に追い詰められていく…

「はあ…はあ…こんな地下牢に逃げ込むなんて…屈辱ですわ…。」

「はい…でもここまでは敵の目も届いていないみたいです…。」

地下牢には現在、捕虜はおらず静寂で包まれていた

まさか特務機関の本部で敵から逃げ回ることになるとは…  
想像を超えた事件の連続で疲れ切った様子の二人だった…

「これからどうしよう…ミカヤさんを放っておけないです…。」

「ええ、彼女も助けないといけませんわ…それに…。」

アーダンがミカヤにより操られたように…  
他の英雄たちも操られ被害が拡大する危険がある…  
しかし…ミカヤ達が操られていることを証明することは難しく  
有効な手立てが思いつかない二人…

「あら…こんなところに隠れていたんですね…？」

「えっ…あなた…っ…！？」

ラーチェルとミルラの目の前に現れたのは…

アンナ隊長と共にニフルへと向かったはずのエイリークであった

「無事だったんですわね…！？」

「まって…エイリークさん…あなたまで…？」

ミルラはエイリークの体からミカヤと同じ魔力を感じ取った

「まさか…エイリークあなたも敵に操られているんですの！？」

「操られているなんて…

人間きが悪いですよ、私は自分の意志で行動しています！」

二人と話すエイリークの背後から次々と姿を現したのは…

屍兵やノスフェラトゥ…異界の怪物たち

「ひいっ！？」

「な…なにををする気ですのっ！？」

「心配しないで…最初は驚くと思うけど

すぐに気持ちよくてやめられなくなるわよ…私みたいにね。」

「ひっ…いやああっ！？」

「やめてっ…お願いこっちへ来ないでっ！！！！」

異界の怪物たちは待ちきれないといった様子で

ラーチェルとミルラへと襲い掛かっていった



「あああ！触らないでえっ！私は聖教国ロストンの…きゃああっ！！」

服を引き裂かれ乳房が丸出しになるラーチェル  
屍兵達はラーチェルの体を抱え、全身を激しく撫でまわす

「あっ！そんなところっ…ダメですわっ！！！」

下着を脱がされ露出した秘部を屍兵は激しく愛撫する…  
処女のラーチェルは初めて味わうその感覚に  
体を震わせ大きな悲鳴を上げる

「あああああっああああっ！！！！」



秘部は溢れた愛液ですぐにぐしょぐしょに濡れ  
ラーチェルは激しい刺激に既にぐったりとしていた…

「すごいわねラーチェル、こんなに濡れちゃって感じやすい体なのね？」

「ち…違うっ…まって…そんな…私の大切な……いやああああっ！！！」

屍兵は躊躇くことなくラーチェルの膣内へと勢いよく肉棒を挿入した

激しい腰使いで攻められ乳房を揺らし喘ぐラーチェル…

「あああ、やめてっ…おねがいっ！！」

ノスフェラトゥに捕まったミルラも服を引き裂かれ  
乳房から秘部までが完全に露出してしまっていた

顔を真っ赤に染め必死に体を隠そうとするミルラだったが  
ノスフェラトゥは両足を抱えてミルラを持ち上げ  
秘部が細部まで観察できるほど両足が開く…

「あら…ミルラすごく綺麗な形しているわね。」

「ああ、やめてっ…見ないでエイリークっ…！！」

「1200歳くらいなのに処女なのね？大丈夫…  
今日から新しい自分に生まれ変わるわよ。」

「い、いやああああっ！！」

ミルラの小さな体に極太のノスフェラトゥの肉棒が  
ゆっくりと挿入されていく…

「ああああっああっ！！？ 入って…きてるっ！？」





いやだああっ!!  
いたっ…こんなこと  
やめてくださいっ…!!

肉棒の先端がミルラの膣内へと挿入された  
じわじわと奥へと入り込んでいく肉棒…  
そのじわじわと来る快感にミルラは喘ぎ声を上げ続け…

「ああああっあ、出ちゃう…漏らしちゃうよおおっ!!」

挿入されて僅かの間に絶頂を迎え…大量の潮を噴き上げたのだった

「ミルラ、気持ちいいでしょ？」

これからはいっぱい気持ちよくなっていいのよ。」

「気持ちよくなって…いいのっ…？」

「ええ…私も…みんなで楽しく気持ちよくなりましょ？」

「う…うん…みんなで…気持ちよくなる…。 ああああっ！！！」

体を揺さぶられ肉棒が激しく膣内で動き  
喘ぎ声を上げるミルラ…

その口元は既に笑顔を浮かべ快楽に魅了されつつあった…

「ああ…ダメですわ…ミルラ…負けないでっ…！？」

「負けるなんて言わないでラーチェル…戦っているわけじゃないのよ？」

「うっ…うあっ！！！」

「私も最初は抵抗しちゃったけど今はすごく楽になったわ…見てて…？」

ラーチェルの目の前で屍兵に背後から挿入され激しいセックスを始める  
エイリーク…

「ほら…すごい気持ちいいわっ…！！」

異様な雰囲気満たされた地下牢…

そんな場所にいただけで不思議な気分になってくる…

ラーチェルの体はその雰囲気を醸し出している魔力により

すでに極限まで体の感度を高められ

肉棒が膣内を貫く刺激に魅了されつつあった…

「あああっああっ！！ ダメえっ気持ちいいのおおっ！！！」

エイリークの前で快楽の声を上げたラーチェル…

「ほらっ！やっぱりあなたも好きなのねっ！！」



「ああああっ！こんな気持ち…初めてですわっ！！！！  
ダメっ…私…っイっちゃいますわっ！！！！」

屍兵の激しい攻めに絶頂を迎えたラーチェル  
激しく噴き上げた潮が美しく噴水のように飛び散っていた

幾度も潮を噴き上げていくラーチェルとミルラ…そしてエイリーク

そして…3人は呼応するように歓喜の喘ぎ声を上げると…

大量の精液が3人の子宮へと射精されたのだった

「ああああああっ！！??」

「あはああああんっ！！！！??」







あああああつ！  
すごいですっ！  
中出し…  
気持ちいいですっ！！

「あはあっ…すごい気持ちよかった…」

「はあ…私も…こんな気持ちになるなんて…」

「今度は…わたしこっちの屍兵さんとセックスしたい…」

「ええ、それなら私は…ノスフェラトゥと…」

「ずるいわ二人とも…私も一緒に…」

マクベスの邪悪な魔力はついに特務機関にまで及び始めた…



# Episide 04

ニフル王国へと潜入し  
姉スリーズとの再会を果たしたフィヨルムだったが  
その再会の場は想像とは違った形となった…

マクベスの秘術により洗脳され淫乱な女へと変貌していた姉の姿に  
自分の目を疑い…信じられないフィヨルム

そしてフィヨルムはムスペルの王都へと輸送される  
そこで待ち受けるのは…

「……………」

フィヨルムが通された広間には…  
スルト王の側近である「ロキ」と  
ムスペルの第二王女である「レーヴァテイン」

そして今回の事件の黒幕である「マクベス」の姿があった  
ロキとレーヴァテインの二人はマクベスの行動を  
無言のまま監視しているようであった

「あなたがマクベス…姉をあんな女にした張本人ですねっ!？」

怒りに満ちた表情でマクベスを睨み付けるフィヨルム

「おやおや、王女ともあろうお方が…  
そんな怖い顔をするものではありませんよ。」

「……………」

「……………」

「一体私をどうするつもりなのです…  
スルトに私の首を差し出すつもりですか!？」

「心配しないでください王女様…私はあなたの首に興味はなく  
…むしろ私の行動はニフル王国も救う結末になるかもしれません。」

「……………」



「あらん、マクベス殿…スルト様を裏切るおつもりかしらん？」

「……………」

マクベスの発言に驚いたのはフィヨルムだけではなく  
ロキやレーヴァテインも同じであった

「私はスルト王の圧倒的な力が世界を支配すると信じております…  
しかし…彼のやり方ではすべてが灰と化すことでしょう…」

マクベスは自慢げに自分が抱いている野望について語り出す…

「しかしスルト王を我が秘術で操り僕とすれば…  
この世界は私の支配の元で平和なものとなる…！」

「うふふ…お馬鹿な男ね、スルト様を操ることなどできるわけがない！」

マクベスの浅はかな考えを笑うロキと  
無言のまま表情を変えないレーヴァテイン…  
フィヨルムはただ驚いた表情のままマクベスの話しを聞いていた

「ところが…誰にでも弱点はあるものです…  
そこを突けば…私の秘術の入り込む隙は十分に生まれるのですよ！」

「なんて愚かな考えかしら！スルト様に弱点など……まさか…っ!？」

マクベスを嘲笑っていたロキだが…突然表情が曇る

「そう…ニフル王国に伝わるという伝承…  
炎の王を倒す伝承こそがスルトの弱点なのですよ！」

ロキの頭の中で全ての出来事が繋がった…

マクベスが求めていたのはスルト王を倒す可能性を持つニフルの伝承…  
それを知るスリーズと…その力を持つフィヨルム  
この二人を洗脳し僕とすることで  
炎の王を倒す剣を手にするつもりだったのだ

「まさか…マクベス…最初からそれを狙って…？」

不気味な笑みでロキを嘲笑うマクベス

「そんな…そんなことはさせないっ！…な…なぜ…体がっ…！？」

「哀れですねえ…私があなた方に何もしていませんでしたか？」

全身に力が入らず…床へと崩れ落ちるロキとレーヴァテイン…  
スルトの命令でマクベスに手を貸しつつその監視の役目を任されていた  
ロキとレーヴァテイン

本来ならマクベスの術にかかるほど間抜けな二人ではなかったが  
彼を監視している間にマクベスの秘術の影響を少しずつ受け続け  
その体はほんの少しずつ魔力に犯されていった…  
そうして長い時間をかけ  
ロキとレーヴァテインを支配下に置いたマクベス

「手間がかかりましたよ…あなた達を洗脳する準備をするのは…。」

「残念ね…私たちはまだ操られてなどいない…！」

体の自由は効かないが…まだ心まではマクベスの支配下になかった

「おやおや…これだけ多くの英雄たちを墮とす現場にいながら…  
これから何をされるかわかっていないのですか？」

「……うそでしょ…まさかっ！？」

「……………」

「その まさか です！」

マクベスは洗脳の最後の仕上げとしてロキとレーヴァテインの二人を  
徹底的に辱め凌辱する…  
極限まで追い詰め快樂の虜にすることが、  
マクベスの秘術の最後の仕上げであった



マクベスが杖を掲げると…異界の門が開いた…  
そしてそこから現れたのは…  
マクベスが異界で調達してきた怪物「ビグル」であった

「……………！？」

感情を表に出さないレーヴァテインもさすがに怯えた表情を見せる

ビグル達はレーヴァテインの体に一直線に向かい  
全身に群がり触手で絡みつく…

「いっ…いやっ………！？」

触手は彼女の服や鎧の隙間から侵入し  
全身の敏感な場所を執拗に攻めてくる

「あっ…ああっ！！！！！？？」

下着の隙間から入り込み膣内へと入り込んできた触手…  
レーヴァテインは体を大きく反らせ  
膣内に潜入してきた遺物に対し拒否反応を見せる…が

「ひああああっ！！！！！？？」

秘術により敏感になった彼女の体は簡単に絶頂を迎え  
大量の潮を噴き上げたのだった



うっあぐっ…  
あああああつ…  
や…やめて…っ…!!  
!!

「さて…スルト王を崇拜するロキ殿には…  
相応しい相手を用意しましたぞ！」

「…なに…これは…スルト様の愛馬……まさか…馬と…！？」

激しく興奮し肉棒を反り立たせたスルトの愛馬…  
その視線はロキの体をじっと見つめており  
既にロキを交尾の対象と定めている様子であった

「ああああ、待ってっ！！ これはっ…スルト様っああ！！！」





いやあっ!!  
こっ…こんな真似をしてっ…  
ただで済むと…うっ!!  
ダメ…すぎるっ…!!

「な…なんてことを…今すぐ彼女たちを解放してくださいっ!!」

「どうしましたフィヨルム王女?

戦争に犠牲はつきもの…しかしあなたの協力があれば  
ニフル王国だけではなくアスクも…ムスペルまでも救う結末に  
なるやもしれませんぞっ?」

「えっ…ニフルだけじゃなく…ムスペルまで…??」

「すべての民がこんな戦争を望んでいると思いますかな?

王は戦争を楽しんでさえおりますが…内政には無関心…  
重い税に苦しみ、夫は兵士として戦い…  
妻は夫の帰りを待ち望んでいるのです…」

圧倒的な力を誇るスルト王とムスペル軍だったが  
その反面…国内では戦争好きな王への反感も強い…

マクベスの言葉は多少誇張されていたが全て事実であった

王都まで連行されてくる間…ムスペルの人々の暮らしを垣間見た  
フィヨルムにはそれが嘘ではないことがわかった…

「そんな…私は一体どうしたら…？」

「私の野望に協力しなさい…そうすれば…  
世界が焦土と化すことは避けられます…！」

「……………嫌です…っ！」

「なんですとっ…断る…なぜです！？」

フィヨルムは強い眼差しでマクベスを睨み付けた

「姉を…英雄さんたちを貶め…あんなことをさせるあなたになど…  
協力することはできませんっ！」

「そ…その瞳…おのれ…カムイ王女と同じ…。」

マクベスはフィヨルムの強い意志が宿った瞳の輝きに怯えた  
それは彼が最も苦手とするカムイ王女と同じ  
…英雄の輝きを放つ瞳であった

「やはり…この娘はカムイ王女と同じ…なんとしても…我が僕にっ！」

マクベスの合図と共に無数のビグルがフィヨルムの体へと絡みついた

「いやあああっ！？」



圧悲鳴を上げ怯えるフィヨルム…  
触手が隠れていた豊満な乳房を露出させ  
下着の隙間から秘部を弄ぶ…

喘ぎ悶えるフィヨルムだが…その瞳にはまだ輝いていた

「くっ…ならば…こいつらだっ！」

マクベスの声と共に連れてこられたのは…

「えっ…そんなっ…あなたたちは…！？」

「フィヨルムさん、私たちも一緒に楽しませてくださいっ！」

「ずるいですよ、フィヨルム王女だけっ…！」

そこに現れたのは…自分を助けようとして捕まったはずの  
カムイ王女とリンの姿だった

全裸のまま恥ずかしがる様子もなく既にマクベスの手で洗脳されている  
ようであった…

「カムイ王女にリン…フィヨルム王女と一緒に楽しみたいまえ…！」

「はい、マクベスさま…。」

カムイたちはお気に入りの男たちを引き連れてフィヨルムを取り囲んだ  
どの男たちも巨大な肉棒を反り立たせ顔を頭巾で隠している…  
今のカムイ達にとって興味があるのは男の肉棒だけとなっていた

「さあ フィヨルムさん、一緒に気持ちよくなりましょ？」

「あっ…ああ、カムイさん…ダメです…そんな目で見ないでっ…！」

カムイは墮落した女目でフィヨルムを見つめた  
その目を見ていると不思議な気持ちが湧き上がってくる…

「あっ…あああああっ!!!!!!」

男に肉棒を挿入され喘ぐフィヨルム…

「フィヨルム…すごく良い体してるのね…!」

「ああ、リンさんっ…そんな…舐めちゃダメっ…!?!」

フィヨルムの体を舌で舐め回し始めたリン…

その異様な空気にフィヨルムの心は大きく揺らぎ…  
その瞳の輝きが次第に消えゆくようであった…





同じ輝きを持った英雄たち…

彼女たちがフィヨルムに与える影響は絶大であった

フィヨルムの目の前で男に抱かれ喘ぐカムイとリン

この声だけではなく鼓動や快樂までも共有しているかの如く  
フィヨルムの気持ちは高まり…体は熱くなっていく…

「ああああっ…いけませんっ…イキそうですっ…でちゃいますっ！！」

喘ぎ声を上げ大量の潮をまき散らしたフィヨルム…

そんな姿を男たちに見せつけ恥ずかしさが込み上げてくる…だが  
フィヨルムの周囲ではカムイもリンも…  
幾度も潮を噴き上げ男たちの肉棒にしゃぶりついていた

「あっ…あああ…あっ…。」

「さあ、フィヨルムさんも啜えてみて…。」

リンに男の肉棒を啜えるように促されるフィヨルム…  
頭の中が真っ白になり何も考えることができなくなる…

「あっ……はっ…はいっ…。」

瞳を閉じ男の肉棒を口内へと受け入れるフィヨルム

「んっ…んぐっ…！！？」

喉の奥まで挿入され苦しそうな表情を浮かべるが…  
気が付けば肉棒を夢中でしゃぶっていた

「ほら、フィヨルムさんも絶対に好きになると思いましたよ！」

「は…はいっ…わたし…好き…ですっ…。」

自ら望んで男の肉棒をしゃぶり…肉棒の攻めを受け入れたフィヨルム

「ほう…フィヨルム王女…どうしました？

こんな行為など望んでいなかったのではないのですか…？」

「ち…ちがいますっ！ 私は…もっと気持ちよくなりたいですっ！」

「では誓いなさい…マクベス様に忠誠を誓うと…その僕となり…

どんな命令にも従うと…誓えば…。」

「誓いますっ…

私はマクベス様の僕ですっもっと気持ちよくしてください！！」

「よ…よろしい…さあ男たちよ…王女を楽しませてやれ…！」

「あっ…あはあああああ！！！」

膣だけではなく尻穴にも強引に肉棒を挿入されたフィヨルム  
激しい腰使いで攻められるフィヨルムは笑みを浮かべ…  
快楽に酔いしれていた…

「あっ…ああああ…もう…だめ、おかしくなります…っ！！？」

そしてフィヨルムの膣内に大量の精液が射精される

体を反らせ強烈な射精を受け入れるフィヨルム

その姿は教会で再会した姉と変わらぬ淫乱な女の姿となっていた





あはああっ！  
私の…中に…みなさんの  
精液が出てます…!!  
たくさん中に出して…  
私を孕ませてくださいっ!!

男たちの精液に塗れぐったりと横たわるフィヨルム カムイ リン

「くくくっ…ついに王女たちを我が手に…それに…」

「あっ…あがっ…あああ…」

「うっ……はっ…あ…」





あはっ…  
はあっっ!!  
もっと…  
攻めて…ください

馬とビグルに散々弄ばれたロキとレーヴァテイン  
精液と体液で二人の腹部は大きく膨れ上がり…  
その意識は朦朧としている様子であった

「スルトの側近二人までも我が支配の元となった…  
これ以上の成果はないだろうな…くくくくく…。」





あつ…あがつ…  
はあつ…  
もつと…もつと…  
私を攻めて下さいっ…

炎の王を倒す剣を我が物にしたマクベス…  
異界からやってきた彼が、  
この地を支配するという野望をかなえる日が来るのかもしれない

しかしマクベスはまだ気付いていない  
まだ彼に立ち向かう最大の敵が残されていることを…

アルフォンス シャロンと共に反撃の準備を整える「召喚士」  
召喚士こそマクベスの野望にとって最大の障害となることを…

END

**END**



いやああっ！  
お願いっ…挿れないでえっ！  
私っ初めてなんですっ…！！

エッ

下下下







あああつ...!?  
私の...中に...っ  
いやっ...こんなのって...

カッ

ドゥ

ドゥ





ああああっ！  
ダメッ！  
あたしは…女の子が好きなん…  
ああああっ！！

クン





ああああっ！  
ダメツ！  
あたしは…女の子が好きなん…  
ああああっ！！

ギョギョ



きゃああああつ!!  
そんなところっ!!  
いやっ!!そんな奥まで!!  
挿れないでっ!!

ズ  
チ

ズ  
チ

ズ  
チ







あああああつ!?  
おなががつ…  
中にたくさん…出てる…





ひぐっ…!?  
無理よっ…!  
こんな太いの入るわけ…っ  
あっ…あぐっ!?

ズズズズ  
。。。。





あはああん!?  
お願いっ…もっとなんか…  
もっとなんか出してええ!?

カ  
カ  
カ

カ  
カ  
カ

カ  
カ  
カ

カ  
カ  
カ

カ  
カ  
カ

カ  
カ  
カ





あああああつ!!  
奥に…奥当たってるよおっ…!!  
なんで…  
なんでこんなに気持ちいいのっ!!





ああああんっ！  
もつと…もつと…  
気持ちよくなりたいですうっ！！



ケケケ

ア

〜

ズッ

ズッ

ああああっ!!  
いやっ…  
みなさんっ…やめてくださいっ!!  
こんなことっ…  
私っ…はじめてなんですっ!!





ああ…すごい  
こんな気持ちのいいことが…  
あったなんて…  
みなさん…もつと私を…犯して…



ああっ!?  
見てフィヨルム!  
私の中にこんなに太いものが…  
入っているわ!!



ああっ!?  
見てフィヨルム!  
私の中にこんなに太いものが…  
入っているわ!!







いやああ!?  
竜に犯されるなんてっ  
ダメツ!  
中に...入ってくるううっ?!

バクン

ズ

ズ





あはああっ…!?  
中に…出てますっ!!  
こ…こんな気持ち…  
はじめてです…!!





ズ  
ズ  
ズ

ズ  
ズ  
ズ

あつ…あがつ!?  
入っちゃったつ…!?  
私の中に…っ…??  
いやっ…ああああああつ!?





カキカキ

ドブ

ドブ

うあああつ!  
気持ちいいですうっ!  
もっど…私の中に  
注いでくださいいっ!!





ああ...すごいっ!  
こんな太いのっ初めてですっ!

ブツ  
ブツ

ブツ  
ブツ

ドキ

ドキ

ドキ  
ドキ  
ドキ





ピャアアア

アーン

あああつ?!  
たくさん出てますっ!!  
子宮が:っ  
ああ、妊娠しちゃいますよっ!!

ゴゴ

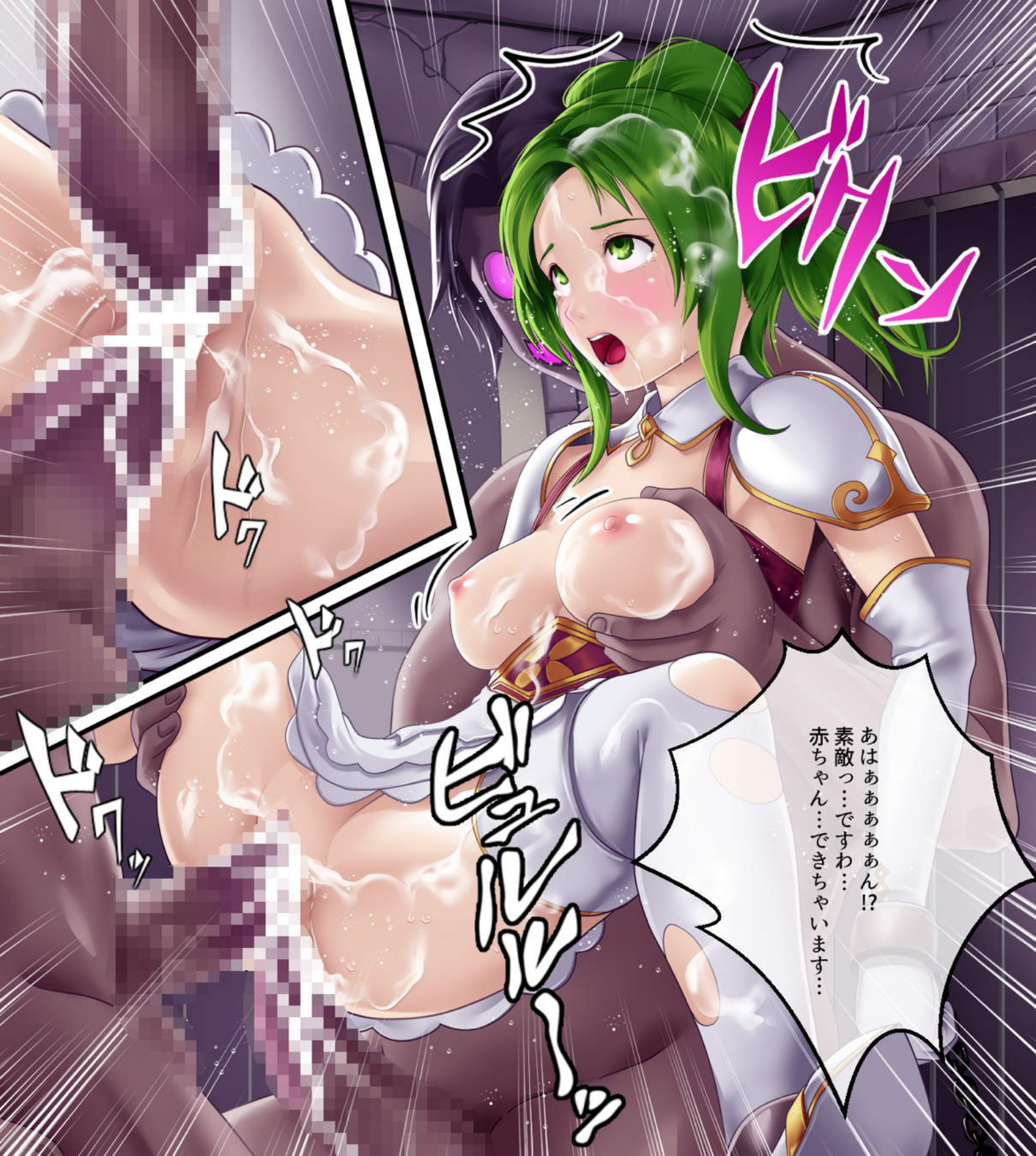
ゴゴ



いやあああつ!!  
私の…大切なっ…  
ダメ…激しくしないでえっ!!







あはあああああん!?  
素敵っ…ですわ…  
赤ちゃん…できちゃいます…





いやだああっ!?!  
いたいっ...こんなこと  
やめてくださいっ...!!





あああああつ！  
すごいですっ！  
中出し…  
気持ちいいですっ！！

あつあつ

あつあつ

あつあつ





いやあっ!!  
こっ…こんな真似をしてっ…  
ただで済むと…うっ!!  
ダメ…太すぎるっ…!!

クン

ズン

ズン



あつ...あがつ...  
はあつ...  
もつと...もつと...  
私を攻めて下さい...

あつ...  
はあつ...  
もつと...  
私を攻めて下さい...

あつ...  
はあつ...  
もつと...  
私を攻めて下さい...





うっあぐっ…  
あああああつ…  
や…やめて…っ…!!

ケケケ

ズ  
チ

ズ  
チ





クハクハ

ドク  
ドク  
ドク

ブ  
アアア

あはっ…  
はあっつ…  
もっ…!!  
攻めて…ください



あああああつ  
やめてええっ!  
ダメです…気持ち良すぎて…っ…  
おかしくなっちゃいますっ!!  
もう我慢できませんっ!!

アッ

アッ

アッ





あはああつ！  
私の…中に…みなさんの  
精液が出てます…!?!  
たくさん中に出して…  
私を孕ませてくださいっ!!

ググググ

グググ

グググ

グググ

グググ





















































































































































































































































































































































































































































































































































































